

---

# 『本能寺の恋』

あつき( ̄ ̄ )

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『本能寺の恋』

### 【Zコード】

Z9017C

### 【作者名】

あつや（、、）

### 【あらすじ】

1582年、戦国乱世の覇、織田信長が本能寺で討たれた。家臣の明智光秀との間に秘められた因縁とは？日本史七不思議のひとつを愛憎恋愛として描いた、本能寺の恋愛小説吟味。

織田信長。その名を聞いて思い浮かぶことは、圧倒的な勢いで天下人の座まであと一歩と迫ったが、家臣の明智光秀に謀反を起こされ自害した、戦国大名。と多くの人は思うだろう。

この話は、今だ日本史七不思議のひとつにされている、明智光秀の決起を邪推し、愛憎の恋愛小説っぽく仕上げたフィクションである。

1581年3月11日、武田勝頼自害する。織田信長はついに武田家を滅ぼした。天下はもうすぐ。この時点で信長に対抗する勢力は、毛利・長宗我部らの微々たるものであった。

その後、信長は本拠地、安土城に戻る。信長はつぶやいた。『わしの天下ももうすぐ』それとともに彼の寿命も迫っていた。

この時代、男性の平均寿命は50代の半ば～60代あたりが普通である。彼はその50代の手前、47歳になっていた。ちなみに信長は常々、人生五十年。と言っていたようである。

話は変わるが、信長には妻がいた。濃姫である。しかし、不仲で、2人の間には子供がいなかつた。又、側室には吉乃がいた。そして、他の戦国大名と同じく男色もあり、前田利家、森蘭丸らがいた。しかし、他にもいたのだ。

・・・それは、名もなき町の娘である。

名もなき町の娘・・・彼女は、病床にある父とすでに亡くなつてい

る母から買つてもらつた、鈴のかんざしを大事にしていたことから、

『お鈴』と呼ばれる。

目鼻顔立ちはすっきりと清楚で、きりっとした眉が心のまっすぐさを表してゐようだった。目には貧しさの中でも希望を失わない輝きがあつた。

お鈴の家は父、兄の3人暮らしだ。父は病床にあるために働けないが、兄はなんとか食べていけるようにと、大名の馬の世話係として働いていた。

もちろんその大名とは、織田信長である。

あるとき、兄は大事な馬の毛をすく櫛を忘れてしまつた。それがないと仕事ができない。それを届けるためにお鈴は、兄の元へと走つた。

門番にわけを話して、兄を呼んでもらつ。門番が兄を呼びに言つている間の、一瞬のことだった。

粗末な服を着た男が数人の護衛とともに来た。お鈴は護衛よりも粗末な格好をしている男に目が釘付けになつた。目が輝いていた。

信長は天下人間近となつても、馬で遠駆けをすることが好きだつた。時には護衛をも撒いてしまうほど飛ばすこともあつた。

この日もやはり信長は遠駆をした。そして城へ戻つてくるときだつた。門前にひとりの少女がいるのが目に入った。信長もまた、粗末

な格好をしたお鈴に目が釘付けになっていた。

明智光秀・・・織田信長の軍師とも言つべき側近。信長の遠駆けについて行つた光秀もまた、お鈴に目が釘づけになっていた。

明智家というのは少々複雑な家系をもつてゐる。明智光秀の前半生は謎に包まれており、どういう人生を送つたのかは謎である。・・・

光秀は昔、まだ斎藤家（斎藤道三）に仕えているときのこと。仕え始めたばかりの光秀は俸禄（給料）は少なく、雑用として働いていた。だが、当時から頭は切れる方だつたらしく、すぐに光秀は昇進。道三の娘の濃姫（のちの信長の妻：帰蝶）の守役に就いた。本当は許されぬこと。しかしながら光秀は濃姫の美貌にとらわれてしまつた。主人の娘に手を出すことは大罪だが、濃姫と光秀は仲がよく、切つても離せぬ仲となつた。

そんなときに、帰蝶が尾張のおおうつけこと、織田信長に戦略結婚をさせられることとなつた。

光秀は道三に泣きすがり、取り消しを求めた。

『うつけの元へなど・・・帰蝶さまがおかわいそうです！』

もちろん聞き入られることなく、道三は信長の元に娘を嫁がせて、盟友となつた。

時はながれ、道三は、婿の信長が気に入り、自領の美濃を信長にあげる約束をとりつけてしまつた。それが原因で、美濃を手中に收めたい道三の息子（本当は道三が滅ぼした土岐家の子で道三が養子にした）：義龍に殺されてしまう。

しかし、光秀はもうすでにその場にはいなかつた。

光秀はどこにいたのか。光秀は旅をしていた。自分の見識を高め、

己を向上させるための旅の道中、道三討たれとの報を聞く。

仕方なく光秀は信長へつくこととした。もともと義龍は好きでなかつた。だが心の奥では帰蝶と会いたい。との思いからだつたのかもしない。

こつして信長率下となり、みるみる昇進。そして軍師となり、そして片腕となり。秀吉と並ぶ程の将軍となつた。

ここにいつたん、帰蝶の話をしよう。帰蝶と信長の仲は、戦略結婚ということもあり、あまりよくはなかつた。

信長は前に紹介した吉乃らがいる。帰蝶はそんな正室なのに正室じやないような窮屈な生活は嫌だつたようで、たびたび光秀に手紙を送つていたそつだ。

光秀は人遣いの荒い信長に不満もあつたが、そんなことで決起し、本能寺の変のような謀反を起こすような男ではない。  
ましてや、起こすとしてもほぼ天下人の信長を倒すのに、自分の配下だけで攻め入るだらうか。

軍師の光秀。もう少し考えて、もう少し戦略をたてたはず。

愛と憎しみは人間の感情でもつとも強い感情であるといふ。それではないかと思つ。

そう。光秀がお鈴に釘付けになつたのは、美貌などのせいではない。また信長さまはあの小娘に手を出すおつもりかっ！と思つたのだ。  
私の帰蝶さまを奪い、そのくせ疎外し、拳銃の果てには他の女をつくる。

光秀の心には人遣いの荒さや、家康の接待役になつたときに食事が腐つていたために衆目の面前で信長に蹴られたり、きんかん頭と呼ばれ頭を叩かれたりでの『小さな憎しみの芽』はあつたが、  
そこに『帰蝶を思う、一途な恋心が裏返しになつた激しい憎しみと

いう肥料』が撒かれた。

愛と憎しみは紙一重。表が愛なら、裏には必ず憎しみがついているのだ。激しい愛には激しい憎しみ。

光秀の目は血走っていた。だが、まだ何とか抑えている感じだつた。当時、大名クラスの人であれば、側室のひとりや二人は当たり前だつた。

しかし、光秀は帰蝶と仲が良かつたこともあり、また、愛していたこともあり、

主人である信長に嫉妬をしていたのかもしれない。

時は戦国。

下のものが上のものを倒すのが起こる得る、下克上の時代である。

光秀には密かな野望があつた。

天下取り。

そう、帰蝶を妻として、天下を取つて・・・

世界を駆け巡る・・・

しかし、それは、光秀にとつては夢のまた夢の話であつて、ただの夢で終わるはずだったのだ・・・

『帰蝶様・・・』

光秀は遠駆けから帰つてきた後、

自室にこもってしまった。

心配する家臣たちをも部屋から遠ざけた。

光秀は考えた。

まずは娘のことだった。

光秀の娘：玉　後のガラシャ夫人と呼ばれるようになる女性である。光秀と親交の深い、細川家の嫡男：細川忠興へ嫁がせている。

（・・・細川家か。）

玉は、細川家が守ってくれるだろう。  
心配いらない。

愛娘はもちろん、一族の皆も細川家に任せればいい。

『帰蝶様・・・私はあなたを・・・』

帰蝶はまた窮屈な想いをするだらう。

最近は信長から声すらかけられないとそうだ。

（また新しい女が入つたら・・・）

光秀は悩んだ。

初めは帰蝶を救うためのことを考えた。  
やがて・・・自分の野望のためのことを考えた。

光秀はこんなことを考えている自分が嫌になつた。

自室にこもつて一日一日。

光秀は数えてみれば49歳。  
信長よりも一年上だつた。

(帰蝶様も年をとられた。  
しかし、いくら年老いても、好きだった。  
愛していた。)

信長様は、帰蝶様をどれほどだと想つてゐるのだろうか・・・

『帰蝶様・・・』

光秀は声に出して、再び呼んだ。

『帰蝶様・・・』

目に涙が滲んだ気がしたが、  
涙は頬を伝わらなかつた。

明智光秀の帰蝶に対する想いは、やがて信長に対する怒りへかわつた。

愛が憎しみへかわつた瞬間だつた。

天正10年（1582年）2月。信長は、馬世話係のお鈴の兄を通じて、お鈴を側室として迎える。

お鈴は新入りには破格の1ヶ月で化粧領を与えられ、安土城へと入城する。

濃姫はまたもや肩身の狭い想いをしなければならず、光秀はそれを不憫に思い、濃姫のもとへ話を聞いてやりに通つていた。

そして、その年の5月15日。徳川家康が安土へ駿河国加増の礼でやつてきた。

そのとき、信長は明智に接待役を命じさせた。光秀は15日から17日までの3日間、豪華な食事や京都・安土を案内したりと手厚くもてなした。

16日までは何事もなく進んだのだが、17日の夕食の際のこと。家康に出した魚が、遠路運んできたため腐っており、それを知った信長が接待役の光秀を蹴つたのだ。

料理人の手違いとはいえ、責任者は光秀。責任をとることは仕方のないことだが、このときの信長には小さな憎しみがあった。

・・・そのことを話すためには、時をさかのぼり3月のこと。信長はお鈴と酒を飲んでいたときのこと。ある側近がとんでもない知識をもつてやってきた。

『恐れながら申し上げます。明智日向守光秀様が正室の濃姫様のもとに通つていることになりますが、信長様はご存知でしたか？』

『なに？それは知らんぞ。光秀め・・・わしの妻に手を出そうとはな・・・！あの金柑頭め！！わしが今まで可愛がつてやつた恩を仇で返そつとはな・・・！』

流浪していた光秀を拾つてやつたと信長は思つてゐる。

飼い犬に手を噛まれたような気分に襲われた。

信長は濃姫の件で少し怒つていたこともあり、何度も蹴つた。

光秀がうめき声をあげた。

信長はそこでようやく我に返つた。

そして光秀は接待役を解雇され、秀吉の援軍として、対毛利の軍団を指揮することとなつた。

そう・・・ライバル秀吉の配下として。

軍を準備するため自領の丹波に戻った光秀は、軍団を編成しながら、自分のライバルである秀吉の下で働くことを思つていた。

信長ももちろんそれを承知のはずであり、悪意があつてのこととか思えない。

また突然、濃姫様と連絡が取れなくなつてしまつたのもいかがわしい。

『なにもいやしいことはしていないのだが。勘違いされていまつているのだろうか・・・。しかし、わしには細川殿や（斎藤）利三がいる。もし、今、手元にいる軍団を安土へ向ければ。そして援軍に細川殿が来てくれたら。』

・ そこまで考えて光秀は自分に後悔した。

『・・・わしは、なんてことを考えているのか！？いくら戦国の世とはいえ、自分は信長様に恩をいただいた身。裏切れるはずが・・・』

・

・ ・・・最後の「ない」とは言えない気がした。・ ・・・光秀は自分が疲れているのだと思つた。

信長は家康を丁重にもてなし、そして、

『せつかくここまで来たのじゃ、京を見物していくよ』

と提案し、家康も賛成した。

そして信長は、家康を見送った後、秀吉へ援軍派遣の件を知らせ、

光秀に出陣命令を出した。そして自らも馬へ乗り『出陣。』と周りに小さく言つた。

そして京の本能寺。安土よりは秀吉のいる高松に近く、また交通要所で移動の便宜上もいこということで信長は本能寺に入る。  
天正10年5月30日のことだった。

信長は光秀より、少々手間取つており出陣遅れます。との連絡を受けていた。

『まつたく金柑頭め。なにをしておるのだ』

少し苦笑いをし、信長は来る最後の壁というべき毛利戦に考えを浸らせていた。

そのころ細川家から光秀のもとへと走る使者が、光秀のもとへ到着した。

『万事、光秀殿へお味方いたす。』と短く書かれた書状をろうの火へと入れる光秀の顔はすでに正氣ではなかつた。燃え盛る書状を見る光秀の目は、もつと遠くを見つめる目で、口元はすつすらと笑みを浮かべていた。

『ついにこの日がきてしまったのだな。わしが天下人となるときが。』

『6月2日正午に織田軍への集中攻撃を開始する』

この書状は、毛利家にかくまわれている足利義昭が、毛利・上杉・

長宗我部・畿内の商人・島津らに送つたものだ。

中国の毛利・足利は羽柴秀吉を。北陸の上杉は柴田勝家・前田利家を。四国の長宗我部は丹羽長秀を。畿内の商人らは大量の金で兵を雇い大坂で反乱を。九州の島津は毛利、長宗我部の後詰を。

1582年6月1日の夜中。明智光秀は京都郊外に兵を待機させる。光秀は兵に武器の手入れを命じた。

そして夜も更け、2日になつた午前三時のこと。光秀は言つた。

『敵は本能寺にあり』と。

光秀の手勢は信長より『えられた兵なので、信長への忠誠が高かつた。光秀は信長を討つということを兵たちに伏せ、出撃した。兵たちは大音声を上げながら、本能寺へと殺到する。兵たちの士気は天をも衝く勢いであった。

運悪く、足利の策略と曰が被つてしまつたのだった。  
(なにやら騒がしいな・・・) 信長は、寝ぼけながらも愛用の直槍を取り出す。

ドタドタッと音がして、森蘭丸が来た。

『申し上げます! 明智様、謀反のことです! 信長様、本能寺はすでに明智軍によつて包囲されており、抜け出す余地もないません

!』

『なにつ! ・・・ 光秀が・・・ なぜだ? 何かの間違いであります? ・・・ そんなわけがない・・・ そんなわけが・・・』

信長はひどくうなだれていた。

『信長様！実際に明知家の家紋をつけた旗が立つてます。それに兵たちが武器を振るつております。そのようなことを言つておられる場合ではありません。一刻も早くここを突破し、裏切り者に正義の鉄槌を！』

蘭丸は小柄な体を震わせながら言つ、そして皆を起こしに走つていった。

皆とは言つても、ここには100人程度の、しかも、料理人だとか世話係だとか馬を手入れする者だとか護衛部隊だとか信長の妻である濃姫らがいた。・・・およそ兵力とは呼べないような手勢であった。

『くつ・・・まさか急襲されようとは。』言いながら、信長は外へ飛び出す。

飛び出た信長がみた、あまりの光景に信長は言葉が出なかつた。明智家の家紋、桔梗をあしらつた、真つ青な群青色の旗がうらめしそうに風に揺れている。

その周りには赤く燃え盛り、まるで生き物のように揺らめく松明の火。

そして黒の鎧を着た、織田家の兵たちが馬世話係を槍で突き殺しているところだつた。

光秀に与えたはずの軍団だつた。

金をおした赤黒い甲冑に身を包む光秀が真直ぐこちらをみていた。血が火に照らされ、きらりと光つて飛ぶ。

真夜中なのに、まるで昼間のように明るい本能寺の中庭は、まさに地獄絵図のような無惨な光景だつた。

『光秀！本当に貴様は光秀なのか！？』

信長は希望を込めて大声で訊く。

光秀も大声で返答する。

『信長！・・・いや、信長様。わたしは、あなた様には大層、感謝しております。なんでもない、このわたしを取り立ててください。た信長様には感謝をしてもしりません。しかし、恩を仇で返さなくではなりません。』

『やはり光秀なのか・・・では、なぜこのようなことをするのだ。次の毛利戦で天下は治まる。乱世は終わるのだぞ？』

光秀はゆっくりと立ち上がり言つ。

『・・・訳はござりまする。まず第一に公家衆貴族のおぼしめしでありますから。他にも・・・濃姫のことです。』

『公家が？どうしてことだ？お濃がどうしたのだ？』

『貴族たちは朝廷を滅ぼそうとする信長様に対し、討伐の勅令を出されつもりです。わたしはござら信長様の命令でも、天皇にだけには刃を向けられません。しかし、ほんとは天皇のために兵をあげたわけではありません。濃姫様のことで兵をあげました。』

『なに！？お濃が好きなのか？好きであるならば、そつございといでのう。こそそと通つたりするから悪いのだ。』

『やうではありません。濃姫様は信長様を愛していた。しかし信長

様はその愛に応えようとなかった。そればかりか、正室をせしおいて吉乃様や、鈴姫様と・・・。

わたしは濃姫様の相談にのつていました。それを濃姫様のもとへ通つていると誤解され、信長様に疎まれていると聞きました。わたしは疎まれても構いませんが、濃姫様だけには害がないようにと思いました。しかし、信長様は濃姫様を閉じ込めてしまい外部の接触を断つてしまいました。

濃姫様は悩みを外に吐くことができずにつらかつたことでしょう。どうすれば信長様に愛されるか、とずっと悩んでおられました。濃姫様は私と血のつながりは薄いですが、兄妹であります。濃姫様は斎藤家と土岐家の子。私は土岐家の血を受け継いでおりますから。『向かつてくる敵兵を槍で突きながら、信長は言つ。

『そうであったか。それが兵をあげた主な理由であるか。』

『さよひでござります。もう敬語を使う必要はなくなりました。主君に兵を向けたといふことは、もう家来ではないといふこと。・・・申し訳ござりん。・・・者どもーあの者を討ちとれいーーー』

『もはや・・・是非もなし。』

まず向かつてきた兵の顔を槍で突きとおし、横から斬りかかろうとした兵を蹴倒した信長は、縁の手すりに足を乗せ、下から槍を突き出してくる敵兵を刺していく。

蘭丸も小刀と直刃の一刃を両手にもち、次々と斬つてゆく。お鈴のおかげで、蘭丸と並ぶ側近になれた、お鈴の兄は小斧でなぎ倒していく。

料理人も包丁を使つたり、鍋ではたいたりしている。

宣教師から貰い受けた、黒人奴隸の弥助はその力を生かして、角材で殴つたりしている。

小姓たちはそれぞれに小刀や石などで戦つている。

濃姫の侍女もある程度武器が使えるらしく、短槍や短刀で戦っている。

濃姫は事の詳細を聞いて、光秀に会おうと、信長の隣までやつてきた。

『光秀・・・なぜかよつなことを? われは、このよつなことを望んでおりません。早々に兵を退きなさい。』

『もう遅いのです、帰蝶様。もう計画は回り始めました。だれにも止められません。』

『光秀・・・もう無理なのですね・・・?』

そのときあまりの抵抗に手を焼いた、斎藤利三の部隊が鉄砲隊を前へ出し、撃ちはなった。

その弾丸は小姓たちを打ち倒し、信長の頬をかすめた。その後隣には帰蝶がいるのに。

『帰蝶!』

あわてて信長は、お濃を抱きしめる。ゆっくりと足から力が抜けていつて、崩れ落ちていく帰蝶。首に当たつたらしい。

『の、ぶな、がさま・・・』濁音を言つのが苦しそうであった。

帰蝶は続けて言つ。

『・・・光ひ、では、・・・私のせいなの、で、す。お許しく、だ、む・・・』

カクンと首が垂れた。

帰蝶の死顔は、なぜか微笑んでいたようだった。

夫である男の腕の中で、帰蝶は眠つた。

信長の目から一筋の光りが流れ落ちた。  
鬼神信長。このときの彼の目は鬼が棲みついているかのじとく、恐ろしい眼をしていた。

信長は悟った。自分は心から帰蝶を愛していなかつた。どこかで戦略結婚だと思っている自分がいて、親同士の戦略に、自分の結婚が利用されただけだと思っていた。

会つた事もないような女と結婚させられた。当然、2人の間に愛はない。と思っていた。

だが、帰蝶は自分のことを愛してくれており、子供こそいなかつたが、帰蝶は今まで自分に黙つてついてきた。

今頃になつて信長は、帰蝶の愛を知る。帰蝶の死と引き換えに。

信長は帰蝶が少し愛しく思えてきた。もういないという現実が、なおさら、そのことを想わせた。

『帰蝶・・・』

『濃姫様！』

光秀は殺すつもりのなかつた帰蝶を殺してしまつたことで、気が動転していた。

信長は直槍を一閃せると、また再び突き始めた。槍が舞うたびに、敵兵が飛んでいく。突いては、斬り、突いては、飛ばしの連続で次々と倒していく。

『帰蝶・・・すまぬ・・・』

槍に帰蝶が宿つたかのように、力がみなぎつた。

蘭丸は、もう信長様を助けることはできぬと判断し、自害を薦める。この時代、敵に首を取らせるくらいなら自分で死ぬ方がよいと考える時代だった。

『信長様！もう持ちこたえる事は無理でござります。私が時を稼ぎますので、中で自害を！敵に討ち取られてはなりません！』

そのとき光秀の号令がかかった。

『・・・もう遅い！・・・もう手加減することはない！・・・濃姫は、もうない！・・・全軍、突撃！信長を討て！』

光秀はやけくそだった。

自らも顔見知りの側近をひとり切り殺した。  
時が止まつたかのように、信長の頭のなかでさまざま思いがうずまいた。

信長はあきらめたくなかった。できることならここで潔く果てたい。自分についてきてくれた、家臣たちや帰蝶とともに戦い抜きたかった。

だが、明智勢は容赦なく銃弾を浴びせてくる。  
味方がまたひとり、ふたり・・・と倒れてゆく。ふと見渡せば、まだ戦っているものは十数人くらいだった。兵でもなんでもない者が戦っていた。

これがもし、同数の兵力なら、こちらの大勝利じゃないか・・・！  
だれひとりとして裏切らず、逃げずに戦っていた。そして死んでいつた。

自分も肩や腕、足などに切り傷がたくさんあった。鉄砲のかすり傷もいくつかあった。

今まで必死で氣づかなかつたがそちら中が痛かつた。

(帰蝶はもつと痛かつた・・・)

信長は、死んでいった者、自分のために戦ってくれた者に感謝を覚えた。

今まで感謝してきたが、今日ほど感謝したことはなかつた。

そして、蘭丸の肩をぽんっと叩くと、退け。と合図した。

蘭丸は首を振つた。

『殿が退いてから、続きます。ああ、おはやく!』

信長は小さく頷いた。そして退こうと向きを変えようとした瞬間、背中に違和感が走り、激痛が走つた。  
敵がすぐ後ろにまで迫つてきていた。背中に突き刺さつた槍をつかんで、その兵を引き寄せ切り伏せる。幸い、あまり深くはないようだつた。

信長は本能寺へと退いた。

仏像がある真ん中の部屋まで走つて行つた。

蘭丸も走つていた。敵が信長の自害を邪魔しないように駆け回り次々と斬つてゆく。

銃弾が脚にはいったが、不思議と痛みはなかつた。

蘭丸は自分の忠誠心を少し誇らしく思った。

父と同じように信長様のために死ねるなら、命は惜しくなかつた。

戸を蹴り倒して、中に入ろうとしていた敵をつらぬくと、もう片方の小刀で首をかき切り、刀を抜ぐざまに次の敵を切り倒した。もう100人以上は倒していた。だが、敵は一向に減らない。

(信長様は自害できただろうか・・・)

まだ生きている数人の味方も本能寺の縁へ集まつてきて、中に入れないように敵を防ぐ。

敵が繰り返し繰り返し寄せてくる。

斬つた。次の敵が出てくる。それも斬つた。

お鈴の兄は小斧が折れてしまつたらしく、敵から奪つた剣で戦つていた。彼の片腕はもうずたずたに切り裂かれていた。

・・・

突然敵が退いた。

何事だ。と思い見ると、黒い鉄がたくさん飛んできた。

蘭丸は胸をぶち抜かれ、腹をぶち抜かれても、倒れても、刀だけは離さなかつた。敵の歓声が聞こえた。

『信長様・・・先に待つておりますから・・・』

口を開いたが声にならなかつた。

うつすらと敵の足が見えた。

目を閉じた。何か温かな光が見えた。感じた。

意識がなくなつていった。

外の騒がしさが嘘のように静かな仏像の部屋までたどり着いた、信長はううの火を畳に落とした。

ゆっくりと燃え広がる火を見つめながら今までの人生が走馬灯のように頭に広がりかけた。

しかし信長は未練を断ち切るようにして、長い髪を切ると、ぼさぼさになつた髪を揺らしながら、小刀を抜いた。

本能寺の中が騒がしくなつた。小刀の白い太刀筋を眺め、蘭丸達の奮闘を思いながら、腹を出した信長は、人生50年と言つていた自分が49年の生き過ぎすぎたかもしれない生涯を惜しんだ。

信長は不思議な気分だつた。死ぬ間際だというのに。  
死ぬ間際にして本当の愛を知り、本当の人と人とのつながりを実感できた。

白い綺麗な小刀がずぶりと、腹に食い込んだ。さつと横へ滑らせる地獄の業火のようにめらめらと燃える炎。

紅蓮の炎が本能寺をゆっくりと覆い尽くす。

外にいた光秀は拡がりゆくその炎を見ながら、『信長・・・』とつぶやいた。

『信長の死体を搜せ!』光秀は焦つていた。帰蝶の冷たくなつた微笑を見て、後悔してきた自分を振り払おうとしたのかもしれない。

愛と憎しみは紙一重。それでも愛はこの世でもっとも美しいものな  
のかかもしれない。

信長と光秀はなにを感じたのだろうか。愛憎の果てに2人は戦つた。  
そして2人とも死んでいった。

光秀ほどの男がたとえ中国大返しがあったとしても、そう簡単にや  
られただろうか。秀吉の好敵手ともあろう男が、なんの策もなしで  
いたはずがないと思う。なにか思いつめる節があったのかもしれない  
い。

愛に生きるには簡単じゃない。でももしそれができるのなら素晴らしいことだと思つ。愛とともに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9017c/>

---

『本能寺の恋』

2010年11月14日03時15分発行